様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2014～2018
課題番号：２６７０５００５

研究課題名（和文）オペライズモにおける社会調査の方法論的研究

研究課題名（英文）Methodological study of Workers' Inquiry in Operaismo.

研究代表者
櫻田　和也（Sakurada, Kazuya）

大阪市立大学・大学院文学研究科・都市文化研究センター研究員

研究者番号：７０５５５３２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,900,000円

研究成果の概要（和文）：オペライズモにおける社会調査の方法論的な固有性の解明を目的としたこの研究ではオペライズモ最初期の1950年代にマルクスの労働者調査が再発見された契機とその射程とを大西洋を超えた知的交流史の視角から明らかにし、社会調査の過程で階級的敵対性のただなかに身をおく点にこだわるその方法論の社会調査史における正当な評価を試みた。調査研究において、理論化の主体はふつう研究者であるものと自明視される。これに対してオペライズモの方法論においては、労働者の知性があらかじめ前提とされた。現実の調査実践の現場では様々な問題を生じうるが、少なくとも方法的態度としてモンタルディ以来の揺るぎない固有性をここに同定できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
オペライズモ以降の戦後イタリア現代思想は、英語圏において人文社会諸科学の理論的な枠組みとして近年では定着しつつある。その根幹にはマルクス再読に由来する階級組成論があるが、それは一次資料によると具体的な社会調査に依拠していた。しかし過去の調査実態はあまり知られておらず、社会調査史の上で十分に評価されてきたとはいえない。ここでの研究期間中に精査できた調査事例はごく限られた範囲にとどまり、また現実の調査現場においては様々な限界を指摘しうる。だが少なくとも労働者の知性を前提としたその方法的態度にこそ今日なお見直されるべき点があり、われわれの共同調査・共同研究の今後のあり方にも示唆するところが大きい。

研究成果の概要（英文）：Operaismo or Postwar Marxian thoughts in Italy, fostered their own radical approaches in social research methodology known as conricerca or co-research after Workers' Inquiry designed by Karl Marx himself in late 19th Century. We traced a genealogy and reassertion of Workers' Inquiry in a minor intellectual history after the World War II and investigated how and why did they find methodological significance of Marx's often overlooked and said to be "failed" trial of survey design. Then we tried to reassess the fundamental importance of researchers' positioning in the midst of class antagonism. Usually in academic discourses, only professional researchers or intellectuals considered to be a theoretical subjects who can make theories or formulate, evaluate, and confirm or reject hypothesis. In Operaismo, on the contrary, methodologically presupporses workers' intellect primarily. Here we can identify the most basic and literally radical idea of conricerca originated by Danilo Montaldi.

研究分野：社会学

キーワード：オペライズモ　社会調査法　調査方法論

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

オペライズモ（労働者主義）とはハンガリー事件以来イタリアの左派知識人が既成の政党から自律的に創刊した *Quaderni Rossi* 誌にはじまる理論傾向である。これは『経済学批判要綱 *Grundrisse* 』をはじめとした資本論草稿群の公刊を契機とした、フランス構造主義と同時代的な戦後のマルクス再読の機運に位置づけられる。

だが 1970 年代アウトノミア運動 il movimento の「労働の拒否」に代表的されるスローガンは人口に膾炙した一方、その理論的背景に共同調査 conricerca と名付けられた調査実践がある事実には、あまり注目されないでいた。しかし近年では新編纂の資料集や古典的著作の復刊も相次ぎ、世界的な再評価は昨今あらたな展開を見せている。

申請者はかねてオペライズモ研究会を主宰し、過去の科研費ではその理論形成過程の解明に取り組んできた。ここまでの研究途上に見出だされた鍵概念こそ、オペライズモにおいて理論と実践の蝶番とされた conricerca=co-research なる調査方法論である。そこで当時の調査実態の把握と方法論上の固有性をたしかめることが、課題として残されていた。

## ２．研究の目的

戦後イタリア社会思想であるオペライズモには、特有の階級論がある。このことは家事労働に賃金を主張したフェミニズムおよび労働概念の再考を迫るポストフォーディズム論、さらにはベーシックインカム論の基礎としても再評価されてきた。また近年再刊された一次資料からは、その理論形成が具体的な社会調査に裏付けられていたことが分かる。

ところが当地イタリアにおいても過去の調査実態はほとんど忘却されて、その意義が正当に評価されてきたとは言いがたい。だから理論における調査の位置をたしかめて、具体的な調査事例に再検討を加え、最終的にオペライズモにおける conricerca の方法論的固有性を解明すること。以上をここでの研究目的とした。

## ３．研究の方法

Roggero (AA.VV.2013) によれば conricerca とは「理論と実践の分離の打破を目指す、労働者と研究者の共同作業」である。理論と実践の乖離といえば、フォイエルバッハ・テーゼ以来の古典的な問題ではある。これに対していわば外部注入論ではなく内在的に応える方法として取り組まれた点に、ここでは注目したい。しかし今日的な社会学の知見からすれば、プロセス志向の調査方法論には他にも提起されてきたことがある。

とすればオペライズモに固有の調査方法論とはそれらと何を共有し、どこが異なるのか？この問いに明晰な回答を与えるべく、ここでは比較方法論的なアプローチをとる。

### ⑴ 基本的な方法

具体的には当初の計画どおり、戦後大阪の調査事例を対照群として、オペライズモにおける conricerca の模範的な調査事例と相互に比較検討することとした。戦後大阪に限定した理由は、調査資料がきわめて豊富かつ入手が容易である利点にもよるが、経済史的条件からみても大阪は繊維・軍需産業の牽引した都市化から戦後、石油危機以降の脱産業化による失業率の上昇に至るまで、ミラノを中心とした北部工業地域にも類似した経過をたどるからである。

### ⑵ 計画からの変更点

当初の計画段階では、具体的な調査事例をなるべく網羅的に収集することを目論んでいた。ところが資料収集に着手すると、共同調査の試みには広汎に取り組まれた記録があり無限定に収集することは到底不可能であることが判明する。そこで研究対象については、ある程度まで操作的に制限せざるをえない。ここではオペライズモ初期の、北部工業地域を対象とした調査事例に注力することとした。また最終年度には、別途予期せざる諸事情から研究期間の延長をよぎなくされる。しかし必要最小限の資料収集は前半に済ませていたので、関西社会学会での中間報告以降、戦後大阪との比較研究に集中することができた。

### ⑶ 調査資料の収集と検討

前半では、当地イタリアでの資料収集のためミラノ、トリノおよびローマ、それに大西洋を超えた調査実践の相互作用を確かめるためアムステルダム、ローザンヌおよびデトロイト等の文書館を訪問調査した。さらにグローバルな研究動向に照らした先行研究の詳細なレヴューをふまえて、後半オペライズモ研究会の機会に、多元的・複眼的な視角から調査事例と相互作用の検討を重ねてきた。

こうして通算 5 年のうち非公表の定例研究会 25 回、一般参加にひらいた会合 5 回を数える。ここまでの研究を通じて、忘却されたオペライズモにおける社会調査の方法論的な固有性には相当程度、迫ることができたと考えられるので次項に詳述する。

## ４．研究成果

日本語による先行研究をみれば、Negri (2003=2004) が conricerca の方法を語る肝心な部分で意味の通らない訳語を当てられたのが実情であり、コンリチェルカの系譜を紹介した引用時にも該当個所は改訳せざるをえなかった (櫻田 2012) 。とはいえ英語圏の先行研究においても

思想史的アプローチが主であり、具体的な事例の調査実態を精査した研究は皆無であるから、まずはオペライズモにおける社会調査の位置を再確認しておく必要があった。

⑴ 事前調査および一次資料調査

とくに 1970 年代以降の注目すべき事例としては、ミラノ市中心部の貧困街区であった Garibaldi-Isola 調査 (Boffi et al.1973) および Moroni の社会センター調査 (AA.VV.1996) がある。しかし 1960 年代から Negri (2003=2004)もヴェネツィア対岸のマルゲーラ港の重化学工場へと毎朝大学出講前早朝に通い、Berardi (2001) も高校時代毎日のように医療器具工場へと通い詰めた経験を、あるいは Bologna (2013) も電気機械工場等へ通い労働者と頻繁に面会を重ねたことを述懐している。このように、必ずしも研究の水準および質量を問わなければ、共同調査の試みはアウトノミアの時代に至るまで相当その裾野には幅ひろいものがある。

後日マルゲーラ港については公害および労災・死亡者数等をつぶさに調査し「労働の拒否」戦術に至る欠勤運動 assenteismo=absenteeism の根拠とした記念碑的な報告書 (Assemblea autonoma di Marghera, 1975) のみならず、ミラノの草の根の文書館である Archivio Primo Moroni, Libreria Libi Senza Data 等の古書店（過去の事前調査に加えて 2015 年 5 月に訪問再調査）またローマの Libreria Anomalia / Centro di Documentazione Anarchica（事前調査に加えて 2017 年 1 月再調査）等の所蔵資料を概観してみれば、*Contropiano* 以来 *L'Erba Voglio, Controinformazione, Lavoro Zero, inchiesta, A/Traverso, Metropoli, Quaderni del Progetto, Quaderni del Territorio, Alfabeta* など無数の雑誌類が、労働運動のみならず、文学的・詩的なものから都市計画に至るまで、生活次元に密着した実態調査などを報告しており、その豊かさには目を見張るものがある。しかし魅力的なこれらの事例をいくつあげても、なお研究課題とした固有性の解明には至らない。そこで研究期間の後半にむけて当初の目的に照らした計画をたてなおすことになる。

他方わたしたちの研究にも併行して、世界的にもオペライズモ研究は深化してきた。そこでグローバルな先行研究を参照すれば、共同調査 conricerca なる概念と方法を生み出した最重要事例として必ず言及されるのが、当初 *Quaderni Rossi* 誌に報告された Alquati (1975) らの FIAT 社ミラフィオーリ工場調査である（トリノ調査, 2015 年 12 月）。この系譜を現代にまで受け継ぐ Roggero は、イタリアの当地でこの概念を再評価した共同研究 (AA.VV.2002) を経てその水脈を Montaldi & Alasia (1960) における移民労働者の生活史調査にまで溯及している（Coté et al. 2007）。

⑵ 二次文献および相互作用の調査

Roggero らの試みは、リーマンショックに対する conricerca を提起した『金融危機をめぐる 10 のテーゼ』(AA.VV2009=2010) のシンポジウムを契機に UniNomade プロジェクトを始動、ombre corte から計 10 冊の叢書を出してかれらは解散した。現在その仕事は commonware, EuroNomade 等に分岐しつつ引継がれている。

こうした現在進行形の営為と英語圏で深められた研究により、この系譜をたどれば 1950 年代にアメリカ社会学の受容があった事実が知られる (Wright 2002, Capecchi 2004, AA.VV 2013) 。そこにはフランス経由で *Socialisme ou Barbarie* の Cornelius Castoriadis, Claude Lefort らを介した C.L.R. James, Grace Lee Boggs ら Johnson-Forest Tendency との大西洋を往復した交友があった。これらの事実は、Cleaver (1979) 以来最新の知見である (Pizzolato 2011) 。

そこで、デトロイト調査（2014 年 8 月）ではウェイン大学ルーサー記念図書館とミシガン大学アナーバー校図書館のラバディー文庫、アムステルダム調査（2014 年 10 月）では社会史国際研究所等の文書館を訪問、のちにオペライズモが調査を重視する契機となるデトロイトの自動車工場でのオリジナルな労働者調査報告 *The American Worker* オリジナル版（1947 年）とタイプ原稿を入手して比較検討、さらには編集時期の Johnson-Forest Tendency 内部通信を閲覧し *Socialisme ou Barbarie* グループとの戦後期の緊密な相互作用をたしかめた。

また元トレド大学歴史学教授 Peter Linebaugh 宅地下書庫では私蔵文書縦覧の機会を得た。1970 年代いちはやくアウトノミアを英語圏に紹介した *Zerowork* グループ内部の書簡類からは、イタリア語との相互翻訳の時間差と入組んだ経路をようやく理解することができた。

⑶ マルクス労働者調査への回帰

1949 年の *Socialisme ou Barbarie* に連載された *The American Worker* は Danilo Montaldi が 1955 年にイタリア語へ翻訳し *Battaglia Comunista* 誌に掲載、この仕事の上に *Milano, Corea* (Montaldi & Alasia, 1960) にはじまる移民放浪者等を対象とした一連の生活史調査はなされていた。この影響下 Romano Alquati は *Quaderni Rossi* 誌上に報告された FIAT 社ミラフィオーリ工場調査を conricerca と呼ぶことになる。*Zerowork* でも当初これが *The American Worker* 由来とは気付かれておらず、その再発見は Cleaver (1979) とその再刊 (2000) をまたなくてはならない。

労働者自身の GM 工場調査報告としての *The American Worker* 分析篇というべき第二部を Ria Stone の名で書いた Grace Lee Boggs は、労働の苦渋を人間的活動の歓びへと転換すべき革命を志したマルクス自身が、労働者の生産現場と再生産過程のすべてに関心を寄せていた、

その証拠として *The New International* 誌 1938 年 12 月号に英訳された労働者へのアンケートを、たしかに重要な事実として注記していた。

それ自身としては散発的な回収にとどまり、報告書を欠いた点においても調査としては失敗と言わざるをえない。しかしマルクスの手になる労働者へのアンケート (Marx1880) が、その設計の点において「社会学」的手法に他ならないことが再発見されたとき *Quaderni Rossi* 誌は FIAT 工場調査を「労働者調査の階級的用法」と位置づけたことになる (Panzieri 1973) 。ここまでの系譜はオペライズモ再評価のなか近年世界的な動向を形成しており、マルクス遺稿の所蔵と新 MEGA の編集でも名高いアムステルダムの社会史国際研究所 IISG の編纂した *Beyond Marx* (van der Linden & Roth 2013) は、その集大成といえる。

しかし社会学のマルクス派の立場からの利用となれば、調査手法そのものに注目すべき点があるのではない。アウトノミア時代の雑誌に見られるグラフィカルな視覚的表現が出色であるとしても、むしろ調査手法としては、標準的な官庁統計の再集計あるいは一般的なアンケート調査によるオーソドックスな社会科学的方法である事例がほとんどというべきかも知れない。となれば、再びその固有性をどこに見定めるかが問題となる。

たとえば歴史学上の方法論的転回においても、またイタリア近現代史研究のインパクトには大きなものがあった。このうち注目すべきものにマイクロヒストリー microstoria で知られる Ginzburg (1976=1984) が晩年の Danilo Montaldi に当時出現したあらたな労働者階級の共同調査をもちかけた事実がある（Montaldi 自身の早逝によりこれは実現しない）。また口述資料によるオーラルヒストリーで大文字の歴史を塗り替える仕事をしてきた Portelli (1991=2016) の方法はアメリカの社会学界でも注目を集めたが、かれもまた重要な原点として Montaldi & Alasia (1960) をあげている。

たしかにそれは内国移民、下層労働力移動、被差別階級の口述史を記述しえた、重要な先行研究である。これらをふまえて問いなおせば、その方法論的な固有性は「どこに」由来したといえるか？　この点を戦後大阪の調査事例と比較して解明することが、わたしたちの最終的な課題として残された。

### ⑷ 戦後大阪・釜ヶ崎研究との比較

ここで注目されるのが、戦後大阪での「釜ヶ崎」研究に他ならない。そこは近現代を通じて「社会問題」の集積点として保健・衛生・犯罪・貧困・福祉・差別・暴動・労働・失業・住宅・野宿者問題など、あらゆる角度から、かつ継続的に社会的な注意を引きつけてきた。いわゆる「釜ヶ崎事件」（第一次暴動 1961 年）を契機として、大阪万博と前後して釜ヶ崎に「あいりん体制」をもたらした行政施策にも大きな影響を及ぼす日雇労働運動の組織化、オイルショックとバブル崩壊という戦後二度におよぶ大不況のたび失業し野宿者化せざるをえなかった人々の社会的な諸実践は、戦後社会学に無視できない衝撃を与えている。

たとえば青木秀男 (1989) は寄せ場を「解体地域」とみなし「労務者」を診断する社会病理学を批判すると同時に、階級の底辺に沈殿した過剰人口をして運動の主体とはみない労働経済学に対して日雇労働運動の現場からの寄せ場研究がありうる、そして「現にある」ことを示しみずから「解放社会学」をめざした。こうして 1980 年代半ばに相次いだ解放社会学会の設立や寄せ場学会の結成等の動向を、八木正 (1996) ならば同時代的に「傍観者的立場の研究から脱して実践的な諸課題に正面から取り組む学問を構築する方向性」として、学術的にも重大な「地殻変動」を迫るものと見る。当時、そこで問われたのは何であったか？

この点をオペライズモの方法と比較したとき、その動因が暴動（運動）の主体に他ならず、問われたのは調査主体（研究者）の位置だということが判明する。

### ⑸ ここまでの結論と今後の課題

換言すれば、オペライズモにおける共同調査 conricerca とは、労働者自身が知的主体となる前提で「ともに」なされるべき仕事なのである。似て非なる方法論としては、たとえば足元の現実に応じて可変的な理論形成を提起したグラウンデッド・セオリー (Glaser & Strauss, 1967) があげられる。その看護「現場」からのアプローチにおいてなお、理論形成を「する」知的主体は研究者とされており、決して患者の方が理論的思考の主体になることは想定されていない。これに対して、オペライズモの方法に固有の点は、労働者（患者）の方にこそ知性を前提として主体化を図るその態度にあった。

省みれば青木秀男 (1989) は、寄せ場労働者を「流動的下層労働者」と規定した船本洲治 (1985) の仕事を、労働運動の現場からの寄せ場「研究」と類別していた。流動する日雇労働者の自律的主体化に解放の土台を見出した「現場からの研究」を、社会病理学ないし労働経済学にも比肩しうる研究として対置しえた青木の方法的態度は、オペライズモとおなじこの前提を共有していたといえる。以上のことが、わたしたちの結論である。

ただし社会調査における態度を問題とする以上、修辞法における助詞の使い方、記述統計の用い方ひとつにもそれは現れると考えられる。この分析のためには、しかし歴史的・社会的な文脈を熟知した上で、きわめて繊細な作業が求められるため、ここでは個別の調査事例にまで踏み込むことが出来なかった。この問題については、次なる課題とされた釜ヶ崎史料の研究を

通じて深めていく所存である。さらに収集資料からは興味深い具体的な事例も沢山見出されているが、それらの紹介を含めて調査結果を十分に公表できたとはいえない。さらには釜ヶ崎にとどまらず戦後社会調査史を再考するような、より大きな課題も視界にはいる。

これらのすべては研究期間の終了後にも、なお継続を期したい。まずはオペライズモの系譜を現代のグローバルな移民の分析に用いてきた第一人者である Sandro Mezzadra の来日講演「移民／階級／都市：現代都市空間の分断と境界をまたぐ労働力移動」（於コーポ北加賀屋 2019 年 6 月）をその第一歩とした。

〔参考文献〕


AA.VV. 1996 *Centri Sociali: Geografie del desiderio,* a cura di Moroni, P. et al., Shake.
AA.VV. 2002 *Futuro Anteriore,* a cura di Roggero, G., et al., Derive/Approdi.
AA.VV. 2009 *Crisi dell' economia globale,* a cura di Fumagalli & Mezzadra, ombre corte.
= 2010 朝比奈佳尉他訳『金融危機をめぐる 10 のテーゼ』以文社.
AA.VV. 2013 *Genealogie del futuro,* a cura di Roggero, G., et al., ombre corte.
青木秀男 1989『寄せ場労働者の生と死』明石書店.
Alquati, R. 1975 *Sulla Fiat e altri scritti,* Feltrinelli.
Berardi, F. 2001 *Felix,* Luca Sossella.
Boffi, M. et al. 1973 *Città e conflitto sociale,* Feltrinelli.
= 1981 山田操訳『現代都市論』恒星社厚生閣.
Capecchi, V . 2004 *A changing society and problems of method: a politically committed research type,* AI & Society, 18(2), pp.149-174.
Cleaver, H. 1979 *Reading Capital Politically,* University of Texas Press.
Coté, M. et al. eds. 2007 *Utopian Pedagogy,* University of Toronto Press.
船本洲治 1985『黙って野たれ死ぬな: 船本洲治遺稿集』れんが書房新社.
Glaser B. & Strauss A. 1967 *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research,* Aldine.
= 1996 後藤隆他訳『データ対話型理論の発見: 調査からいかに理論をうみだすか』新曜社.
Ginzburg, C. 1976 *Il formaggio e i vermi,* Einaudi.
= 1984 杉山光信訳『チーズとうじ虫』みすず書房.
Marx, K. 1880 Enquête ouvrière, *Revue Socialiste,* 4.
= 1954「労働者調査」『労働組合論』国民文庫
= 1968「労働者へのアンケート」『マルクス=エンゲルス全集』19, 大月書店.
Montaldi, D. & Alasia, F. 1960 *Milano,Corea. Inchiesta sugli immigrati,* Feltrinelli.
Negri, A. 2003 *Guide,* Raffello Cortina.
= 2004 小原他訳『〈帝国〉をめぐる五つの講義』青土社.
Panzieri, R. 1973 *La ripresa del marxismo-leninismo in Italia,* Sapere.
Pizzolato, N. 2011 Transnational Radicals: Labour Dissent and Political Activism in Detroit and Turin (1950–1970), *International Review of Social History,* 56(1), pp.1-30, IISG/IISH.
Portelli, A. 1991 *The Death of Luigi Trastulli: From and Meaning in Oral History,* SUNY Press.
= 2016 朴沙羅訳『オーラルヒストリーとは何か』水声社.
櫻田和也 2012「コンリチェルカ: 恐慌に内在する方法論」『現代思想』40 巻 2 号, 192-202 頁.
Wright, S. 2002 *Storming Heaven,* Pluto Press = 2008 trad. Montefusco, W. *L'Assalto al cielo,* Alegre.
van der Linden, M. & Roth, K. H. eds. 2013 *Beyond Marx,* Brill.
八木正 1996『被差別世界と社会学』明石書店.


## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 櫻田和也「労働の拒否という思想」『教育と文化』89 号, 58-62 頁, 査読無, 2017 年 10 月.
② オペライズモ研究会「ある研究者のストライキ」『現代思想』44 巻 21 号, 174-190 頁, 査読無, 2016 年 11 月.
③ 櫻田和也「ポストモダン都市・大阪」URP Report Series, 33 号, 101-121 頁, 査読無, 2015 年 03 月. https://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/publications-and-archives/report-series/
④ Takeshi Haraguchi & Kazuya Sakurada, “Deconstructing the myth of Japanese society: to reclaim the concept of 'precarity'.” *Dialogues in Human Geography,* 5(1): 118-120, 査読有, 2015 年 03 月. DOI: 10.1177/2043820614563440
⑤ 櫻田和也「社会学における〈経済学批判〉序説: 方法論的構造主義のために」『現代思想』42 巻 16 号, 183-195 頁, 査読無, 2014 年 12 月.

〔学会発表〕（計 10 件）
① 櫻田和也「大阪の大学と非正規労働者の現状」関西非正規等労働組合, 2018 年 12 月.
② 櫻田和也「監獄情報グループにおける下層プロレタリア問題」京都大学人文科学研究所, 2018 年 01 月.
③ 櫻田和也「戦後日本の相対的過剰人口: 高度成長期以降の不安定就業論を再考する」政治経済学・経済史学会, 2017 年 10 月.
④ 櫻田和也他 5 名「だれが・なんのために〈調査〉するのか？」関西社会学会, 2016 年 05 月
⑤ Manuel Yang & Kazuya Sakurada, "Commoners, Renegades, and the Money-Form: Desertion and Refusal of Labor in Early Modern Japanese and Global Capitalism." *Internationaale Instituut voor Sociale Geschiedenis,* October 2015.
ほか 5 件.

〔図書〕（計 3 件）
① 櫻田和也監訳『エンドノーツ』航思社, 2019 近刊.
② Marcel Van Der Linden, Hugh Murphy, Johanna Wolf, Tobias Karlsson, Hans-Jakob Ågotnes, Jan Heiret, Kari Teräs, Sjaak van der Velden, Giulia Strippoli, Davide Tabor, Luciano Villani, José Gómez Alén, Rubén Vega García, Jorge Fontes, Raquel Varela, Ana Rajado, Sarah Graber Majchrzak, Constantin Ardeleanu, Robin Dearmon Muhammad, Cintia Russo, Juliana Frassa, Claudiana Guedes de Jesus, Elina G. da Fonte Pessanha, Luisa Barbosa Pereira, Lisa Milner, S.M. Fahimuddin Pasha, Nicola Mocci, Takeshi Haraguchi, Kazuya Sakurada, Wonchul Shin, Stig Tenold, Victoria Culkin, *Shipbuilding and Ship Repair Workers around the World: Case Studies 1950-2010,* Amsterdam University Press, 748p, March 2017. DOI: 10.5117/9789462981157
③ Benjamin Fraser, Andy Merrifield, Les Roberts, Malcolm Alan Compitello, Marc James Leger, Cayley Sorochan, Heather A. Vrana, Jeff Hicks, Kimberley DeFazio, Jelle Versieren, Brecht De Smet, Manuel Yang, Takeshi Haraguchi, Kazuya Sakurada, *Marxism and Urban Culture,* Lexington Books, 282p, April 2014.

〔産業財産権〕
該当ナシ.

〔その他〕
ホームページ等
https://rootless.org/operaismo/

## ６．研究組織

⑴ 研究分担者
該当ナシ.

⑵ 研究協力者
研究協力者氏名：北川 眞也
ローマ字氏名：Shinya Kitagawa
研究協力者氏名：原口 剛
ローマ字氏名：Takeshi Haraguchi
研究協力者氏名：ヤン マニュエル
ローマ字氏名：Manuel Yang

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。